

第10回研究会

動機づけに関する研究 評価と測定の視点から

- 特に興味について -

上淵 寿（東京学芸大学助教授）

2005年10月13日

於：東京大学赤門総合研究棟 A200講義室

動機づけに関連する話題の中でも、特に「興味」に焦点を当ててお話いただいた。「興味」の定義はいくつかあるが、デューイのように主体と客体（刺激）との相互作用ととらえると、その組合せや主体にとっての「馴れ」の程度にも注目する必要があることが指摘された。また、発達の段階による違いも注目に値する。一方、興味の測定については、自己評定の他、行動レベルや身体反応（脳や他の器官）の測定などに範囲を広げて検討される必要がある。

また、とかく単純に「何にでも興味があるのはよいことだ」とされやすいが、果たしてそうだろうか、という問題提起がなされた。「気分一致効果」を考慮すると、分析的、批判的思考を要する課題の場合には負の感情の方が適した情報処理を促す可能性もあり、その場合には「正」の感情と考えられる「興味」が必ずしも効果的ではない可能性も指摘された。この問題提起については、フロアからも多くの質疑等が出されて活発な意見交流が行われた。

（本稿は講演および事後の質疑応答の内容を事務局が要約的にまとめたものである。）

かりにくくなることも多いかと思われますので、本日は「興味」に焦点を当ててお話ししたいと思います。

発表の観点

上淵：ご紹介いただきました上淵と申します。

「動機づけ」に関して、「評価と測定の視点から」というテーマをいただきましたが、本日は、特に「興味」に焦点を当ててお話しさせていただきます。

さて、私は今まで「動機づけ」を研究してきたつもりでした。しかし、今回のお題を頂き、よくよく考えているうちに、そもそも「動機づけ」とは何だろう、というところに行き着いてしまいました。改めて考え直してみますと、私は多分、「意欲」や「やる気」あるいは「動機づけ」という言葉で表されるものの一部について、調査なり実践なりをしてきたのではないかと考えるに至りました。しかし、そのような「動機づけ」や「やる気」に関わる様々な要因を全て網羅して考えるのは難しいことですし、わ

1 興味とは

1.1 興味

ご存知のように、現行の指導要録では、いくつかの観点で評価を行うことになっています。「新しい学力観」という話が出てきた時に、そのうちの「関心・意欲・態度」が「知識・理解」などに比べて上位に位置するように示された話題に上りました。

「関心・意欲・態度」に関連して、「動機づけ」に関わる様々な心理現象があげられます。例えば、「内発的動機づけ」であるとか、「自己効力」や「自尊感情」であるとか。あるいは「原因帰属」などもそうですね。非常に事

細かな動機づけに関わる心理学の用語が存在します。ここでは特に、そのうち「興味」に絞って話をしたいと思いません。

1.2 興味の定義

よく調べてみますと、「興味」についての先行研究というのは、それなりに存在しています。しかし、その「興味」の定義が、実は研究者によって随分違っているということがわかりました。

スライド1では、Renninger たちが提唱しているものを紹介しています。例えば、今日の私のお話でも何でもいいのですが、「特定の物事や人や現象への特に感情的な反応、あるいはその物事への注意の焦点化、つまり着目するというような心理状態」と、ここでは定義しておきたいと思えます。

スライド1

興味とは？

- ・ 特定の物事への感情的反応やその物事への注意の焦点化のある心理状態(Renninger & Hidi, 2001)。
- ・ デューイ: 主体と客体の相互作用で生じる。
- ・ 刺激に対する新奇的評価

- ・ 興味の詳細な内容
 - 対象への注目(注意)、働きかけようとする行為、何か快経験が生じるという予測、行為すると快経験が生じるという予測、対象自体の魅力(誘因価)が高い、正の感情。
- ・ 個人的興味と状況的興味

- ・ 蛇足: 無力感…相互作用がないという知覚、感情。

ちなみに、「興味」に関しては昔から研究があり、例えばデューイは「主体と客体の相互作用で生じる」として、「人が何かに一方向的に興味を持つ」というよりは、むしろ「相互作用の中で」興味という感情 あるいは情動と言いつてもいいかと思えますが、生じるのではないかと考えています。なぜかという、例えば、赤ちゃんがおもちゃを使って遊んでいる時に、赤ちゃんがおもちゃをいじると、おもちゃの方が動いてくれる。そこで、赤ちゃんが更に面白がってそのおもちゃに関心が向く、というように、何かこう、一方向的ではなく、お互いの関係の中で興味が生じてくると考えることができるのです。

また別の面から言うならば、「刺激に対する新奇的評価」と書きましたが、自分にとって何か目新しい、おもしろい、めずらしいというような評価が「興味」というもの

の中にあり、自覚されるのではないかと考えています。

ちなみに「評価」という言葉をわざわざ使っているのは、心理学では、いわゆる「感情」が生じる場合には、必ず何らかの刺激が与えられて、それに対して何らかの「評価」がなされるとされているからです。「評価」というものは、大脳の新皮質よりも、もっと下の奥の方、例えば海馬であるとか、視床下部の辺りでも、実は行われている意識はできないわけですがと言われます。意識的であるかどうかに関わらず、何らかの「評価」が下されている。そして、「これは新奇だ」、「このものはめずらしい」というような「評価」が下された時に「興味」が生じると考えることができます。

1.3 個人的興味と状況的興味

それからもう一つ。「個人的興味と状況的興味」という言葉が出ています。簡単に言えば、「個人的」というのは興味を比較的持ちやすい人、とお考えください。「個人的興味」が高い人は、いろいろな物事に興味や好奇心を持ちやすい。逆に低い人は興味を持ちにくいと言えます。つまりパーソナリティや人格特性、属性のようなものです。一方で、「状況的興味」というのは、パーソナリティとは関係なく、何か物事が起きたときにみんなが面白がるというような、場面からの、その場限りの興味のことと考えていただければよいかと思えます。

1.4 発達の観点

実はこの辺りの話は「発達」という視点から考えると、もう少し吟味する必要がある内容です。先ほど赤ちゃんの話をしました、赤ちゃんが「面白い」と感じる場面を考えてみましょう。赤ちゃんには何か具体的な「目標」や「基準点」が頭の中で定まっていて、「それに達したから」とか、あるいは「それとずれているから」面白いと思うわけではありません。むしろ単純に何か新しいものが目に入って来たから喜ぶ、というところがあるわけです。しかし、そこからだんだん発達していくと、大人の私たちのように物事に対して「面白い」とか「面白くない」という基準が徐々に出来上がってくるのだと思えます。

赤ちゃんの研究の例は色々あります。0歳児から2歳、3歳児ぐらいまで、乳児期から幼児期初期の辺りと考えてください。その中で比較的良好に研究されるテーマに「赤ちゃんはなぜ行動するのか」、があります。簡単に言えば、ハイハイしたりよちよち歩きをしたりしている時に、面白そうなものがあったら手に取ってみる、そのようなこ

とが如何にして起こるかというようなことを、発達の研究では色々な視点から考えています。

1.5 マスタリー・モチベーション

動機づけの研究としては「マスタリー・モチベーション」というような名称で研究がされています。その中で中心的な活動をしている Messer という人は、「マスタリー・モチベーションは新しいもの、新奇なものへ子どもが興味を示して、それを使ったりすることである。その発達は、簡単に言えば注意のシステムというものがしだいに統合されていくという風に考えていだろう」と言っているわけです (Messer, 1993)。つまり、「興味」というものは、ある物事にきちんと注意を向けることが不可欠だというわけです。

1.6 馴化・脱馴化パラダイム

またこれは余談ですが、乳児に関するいわゆる認知発達の研究などで、よくやられることに「馴化・脱馴化パラダイム」というものがあります。具体的には、何らかの刺激を赤ちゃんの前に見せると、赤ちゃんは、最初のうちは変わったものだとじっと見ているのですが、そのうち段々つまらなくなってくると、見なくなってしまう。そこで、また新しいものを目の前に見せると、ぐっと見入ってくるわけです。要するに、あるものに飽きてしまっても、別のものが出てくると、もう一度興味を示すということです。最初に見せたものと後に見せたものが違うので、識別ができていく証拠になるわけです。これは、乳児期あるいは幼児期初期の研究中核をかなり占めている実験パラダイムだと言えます。

1.7 大人にとっての「興味」

では、大人はどうか。大人はどうかという研究はあまりされていないのです。今後、研究しなければと思っているのは、大人の興味の範囲がどうして偏っていくのかということ。

動機づけの研究の分野においては、とかく「やる気がある人がいい」とか、「勉強できる人はやる気がある」とか、既存の考え方に偏りがちです。しかし、考えてみると、必ずしも、そういう「何にでも興味を持てる人」、「何にでも一生懸命やれる人」というのが、本当にいいのかどうか。ちょっと微妙なところがあります。そういう状態で上手くいっている人もいるとは思いますが、そうではない人もいだろう、ということ。

赤ちゃんから、大人になっていくまでに、どのように興味というものの幅が変化するのか、あるいはその内容というものが変わってくるのかということも、実は調べていかなければいけないような気がいたします。

2 興味の測定

2.1 「測定」の目的について

測定に関する話をしてほしいということだったのですが、いつも申しますのは、綿密な測定尺度、測定道具、測定器具のようなものが本当に必要かどうかという、必ずしもそうではないのではないか、ということです。また、そういうものを一般の教育者が柔軟に十分に使いこなせるかということ、そうではないわけです。ですから、まあ、なるべく安全で簡単に使えるような物の方がいいだろうと考えています。

また、測定の「道具」や「尺度」は、あくまでも「評価」のために使われる必要があります。「評価」というのは、「5」を付けたり「2」を付けたりということではなくて、教育をする側がどのように学習者とコミュニケーションをとって、その関係の中でどういう風にお互いに変化したのかです。この範囲において「評価」という言葉を使っています。そのための測定の「道具」あるいは「手段」であると思っています。

スライド2

興味の測定

- 測定には、できるだけ簡便に使える道具が欲しい。
- 評価の道具としての測定尺度、評価に情報をもたらす行為としての測定。
- 興味の測定 (Ainley & Hidi, 2002)。
- テキストのタイトルを提示 興味の測定 (自己報告による評定 (1次元尺度))。
- テキストの種類を変える。
- テキスト間の興味の共通性 個人的興味。
- テキスト間の興味の差異 状況的興味。
- 眼球の瞳孔面積 眼が輝いていると興味がある。

2.2 興味の測定（Ainley&Hidi,2002）

いろんな測定の仕方がありますが、本日はカットし、ここでは非常に簡単な、実験的なものとしての興味の測定について述べておきます。Ainley 達の研究です。

実験では、テキストを読ませるのですが、まずその前にタイトルを見せます。そして、実際にテキストを読む前にどのくらい興味が湧いたのかを、例えば5件法なら5件法で評価させます。「ものすごく面白そうに興味がある」というようなものから、「興味がない」というところのどこかにマルを付けてもらって評定させます。

まあ、非常にラフな方法なのですが、テキストの種類をどんどん変えて配るのです。そこで、何種類かのテキストを読んでもらった時に、テキストの間で興味の共通性が、もし見られたならば、それはその人が持っている「個人的な興味」が高いということになる。あるいはテキストの間にも興味の違いがあるならば、それは「状況的な興味」と考えることができます。

2.3 身体反応からの測定

よく総合学習などで、子どもたちの取り組みを追いかけていくようなことがあります。そういう時に「しかし、結局何がわかったの？」などということが、よく問題になります。そこで、その時に、「いや、昔に比べてこんなに目が輝いているでしょ」というようなことが言われるわけですね。では、目の輝きが違っていたらどういう意味があるのか、考えてみましょう。

よく調べていくと、意外なことに眼球の瞳孔面積の拡大、つまりそれが目の輝きですけれども、実はどうも「興味」についての主観的な報告（本人による評定）と、瞳孔の面積との間には何らかの関係があるらしいという研究があるんですね。そこで、実はその「目の輝き」をもって、「興味」を示していることの現れとして使えるのではないだろうか、というような研究もありました。

また、東京学芸大学の私が勤めている教育心理学講座には、教師のノンバーバル行動を研究されている河野義章先生という方がいらっしゃいます。その方に、子どもが興味を示した時のノンバーバル行動について、何かないですか、と質問してみましたところ、こういうのを教えてくださいました。

学生に、「授業を聞いている時の姿勢として、前のめりになっているのと、後ろのめりになっているのとで、どっちがやる気があるのかな」というような話を実演して見

せながらするのだそうです。それで、「どちらがやる気があるか」を答えさせて、「じゃあ、あなたたちがやってみよう」と言っていて、実際にやらせる。そうすると、前のめりになっている人が多くなるだろうという話なんです。

これは、オチのある話で、「その時あなた方、手は何をしている？」と尋ねてみる。そうするとまあ、やる気のない学生などは、何も持ってない、という話があるそうです。あくまで逸話的なものですが、そんなことも実際に「興味」を調べていく時には使えるかなと思います。

もう少し違うことも考えられるかと思うのですね。例えば、今の私のように何人かの人たちの前で一方的に話をする場面について考えてみてください。授業だったり講演会だったり色々想定できると思います。この場合、一方的に一人で喋っているにもかかわらず、何となく気分が乗って「ああもっと喋りたいな」という雰囲気になることがあります。一方で、そうではなくて、喋っていると段々と声が上がってしまって、何か響いていかない、というような時もありますよね。このようなことから、何かできるようなことがないのか、何らかの小さなことから得られないか、ということは常に感じております。

3 興味を持つことは良いことか

3.1 何にでも興味を示せばいいのか

ここで、話を戻します。先程言ったように、「何にでも興味を示すことがいいのかどうか」というお話です。結論からいうと、何にでも「興味」を持つ必要はないかもしれません。

スライド3

何にでも興味を示せばいいのか？

- だが、何にでも興味をもつ必要はないのでは？
- 興味がない、やる気がないことが、すなわち問題とは限らない。

学校の先生方よりは、むしろ教育心理学の人達で、あまり教師に関わっていない方達の中に「興味がない」ことや、「やる気がない」ことは悪くて、「興味」を持つことがいいことだという考え方に何となく固まっている人がいるように感じます。

しかし、人は必ずしも「何にでも」興味を持つ必要はない、と私は考えます。ところがそれは私が大人だからであって、子どもの場合には小学校だったら、国語・理科・社会・算数など全教科にわたって評価もされるし、全てにある程度の興味を示さないと授業にもついていけなくて後々困るのではないかと、という考え方もあるでしょう。しかし、必ずしも全てのことに「興味」を持って関わる必要はない。言い方を換えるならば、私たちはスーパーマンである必要はないわけです。スーパーマンというか、何にでも「興味」を持って、色々なことができるように頑張る必要は無いような気がいたします。

3.2 将来の可能性への小径としての興味

ただし、別の観点で、例えば、将来への可能性を開いておくという意味では「興味」というものは重要ではないだろうか、と考えています。最近では「進路指導」という言葉に代わって「キャリア教育」という言葉が段々と使われているのは、ご存知のとおりです。一例では、「日本進路指導学会」は今年から「キャリア教育学会」に名称が変わりました。

従来の「進路指導」では、例えば、中学生だったら「どこの高校に行くのか」、高校生だったら「大学受験をどうするのか」のように、次の進路先の決定に重点が置かれていたわけです。ただで本当は、人というのは何も次のステップに上がる時だけではなく、生涯にわたって色々を選択をし、自分で考えて判断し、次の行動に移していくという過程で変わっていく存在なのだ、言い方を換えるならば生涯発達をしていくものなのだ、と考えられます。そこで、生涯にわたって自分の考え方や価値観、付加価値など、持てる能力を育てていくこと、いわゆる「キャリア」という言葉ですが、について学校教育の中で、もっと重視していく必要があるのでは、と最近言われるようになっていきます。

しかし、「キャリア教育」というのは、いわゆる「生徒指導」などと一緒で、特定の時間は割り当てられてはいません。なので、現場の先生方は困ってしまうのですね。

キャリアを培っていくには、簡単に言えば、「これから自分はどのように生きていくのか」とか、「何を調べてい

こうか」とか、「人とどういつながりを持っていこうか」ということを主体的に選び取りながら生きていけるようにならねばならない。「自己学習力」なども絡んでくるのだと思います。そのようなことができるには、まず、キャリアを育てるためのさまざまな活動にコミットすることが必要で、さらにコミットするには「興味」が必要だ、と言えます。例えば、小学校の段階から10年後とか20年後の自分のキャリアが具体的にどうなっているかと思いつき、それに向かって一生懸命努力する、などということはなかなか難しいものです。ですから、あくまでも可能性として、後から色々なことに向かっていけるように、色々なことをに興味を持ってやっていく必要があるだろうと思います。

4 「興味」と「学習」の関係

4.1 どうして興味が学習に影響するのか

では、そもそもどのように「興味」は学習に影響するのでしょうか。これにも色々な考え方があり、例えば「内発的動機づけ」の話と「興味」の話は比較的関連します。ご存知の方も多いかと思いますが、Hunt という人が言った「最適不適合説」というものがあります。

例をあげます。「自分が既に知っていること」と「今、目の前で相手が話していること」に、どの位ギャップがあるのかを考えます。全然わからないような話だとつまらないし、すぐわかっている話もつまらない。だけど、中程度にわからないような話だとおもしろい、というような話です。ということは、「興味」がある意味で、知識を得る場面に影響していることが考えられます。実は、内発的動機づけと興味の関係には他にも色々あるのですが。

一方で、このような例もちょっと考えていただければと思います。感情の研究でよくある話に「感情の非対称性」というものがあります。「気分一致効果」について、ご存知の方もいらっしゃると思いますが、簡単に申し上げます。

例えばポジティブな気分になっている時には、それに関係するような情報処理がされ、逆に負の感情、つまりマイナス、ネガティブな気分の時にはそれに関わるような形で情報処理がされるという話です。だから嬉しいと

きには嬉しいこと、楽しそうなことをいろいろと思い出したりするし、あるいは悲しい時には悲しいことを思い出したりするということです。ところが、必ずしもそれがうまく合わないことがある、というのが「感情の非対称性」であります。正の感情の時には期待されるような正の感情にマッチするような情報処理がされるのに対して、負の感情の場合にはそういうことが起きない場合もある。この辺りの話は色々で最近研究が進んで非常に複雑なのですが、大まかにはこういう話です。

では、それを学習に結び付けて、どのように考えようか、ということです。問題解決や推論にも「気分一致効果」というものがあります。感情が促進する情報処理と課題との間に、相互作用というかマッチングのようなものがあるということですね。正の感情の時には、簡単に言えばざっくばらんに「ああ、わかった」というような気分を与えてくれるような、ヒューリスティック（発見的）な処理が促される。つまり綿密ではなくて、荒っぽくて雑なのですけれど、何となくわかったような気にさせてくれるような情報処理です。その結果、創造的な課題については成績が上がる、という話です。しかし、負の感情の場合には、むしろ実質的な処理というか、よく考えて厳密に論理的に行うような情報処理が促される。そのため分析的課題、例えば演繹的推論や三段論法などの課題が比較的好くできる、という話があります。



そこで「興味」にどう関連するのか考えてみます。「興味」は正の感情です。なので、「気分一致効果」と「興味」を少々強引に結び付けて考えると、実は「興味」があることが学習活動全般に有効であるとは限らない可能性もあるということです。言い方を換えるならば「興味」を持ったからといって、即それが学習活動を促進するかというと、必ずしもそうではなくて、課題や方法によっては「興味」を強く持っていることがかえって邪魔になってしまう可能性もある、ということを言いたいわけです。

従って、いわゆる「関心・意欲・態度」というようなものを評価しようという話がありますが、必ずしも「やる気」や「意欲」「興味」を持っているという状態を促進するのが教育として必要で、そのように子どもを成長させなければいけないのだと決めつけてしまうのは、問題があるかもしれないと思います。

4.2 まとめ

当然ですけれども、「興味」というものは脳内活動や神経レベルの活動として捉えることができます。脳科学の研究と共に、そのような視点から、他の臓器の反応も含めて考えることができるだろうと思います。何らかのノンバーバルな反応も見ながら教育的に関わっていく必要があるだろうというわけです。

それから最後に触れましたように、いわゆる「興味」のような正の感情というものが、どんな場面でも学習を促進するとは限らないわけです。さらに、「興味」は、先ほどデューイの言葉を引用しましたが、個体内の現象と言うことはもちろん可能なのですが、相互作用の中で生じていくものです。相互作用があるということは、

スライド4

まとめ

- ・ 動機づけ研究として興味とその測定・評価を例示。
- ・ 測定は厳密にしようとするれば、いろいろ方法が考えられる。
- ・ 眼が輝く等の特徴も教育上に意義あり。他にも、足が前に出ているか出ていないか。
- ・ 正の感情や動機づけが必ずしも学習効果を示すとは限らない。
- ・ 興味は個体内だけにとどまるのではなく、相互作用の間にある。
- ・ いわばメリハリのある教育が必要か？

言い換えると、学習の場面にメリハリがあるということで、何らかのリズミ的なものがあるような教育が必要なのか、とも思います。

ありがとうございました。

5 質疑応答

興味が多いことは良くないのか

例えば、色々なことに興味を持っているのだが、分散してしまって飽きっぽいような場合、興味を持続させなければ学習効果も上がらず、例えば何かを研究するにしても結実しないだろう、というのがお話の趣旨だったと思います。しかし一方で、将来への道を開いておくことも必要だ、可能性の道を開いておくことが必要だ、というお話でした。私としては、あることに興味を持って、それをずっと思い続けるということも大事だと思うのです。そこで、興味が多い、気が多いということについて、どのようにお考えになっているのか、教えていただければ幸いです。

上淵: このような言い方すると申し訳ないのですが、本当に、それは妥協をするということだと思うのですね。確かにいろんなことに「興味」を持っていて、その全てに深く関わろうとすると、限られた時間なり資源なりということを考えるならば、どうしても浅く広くという形になります。一方で、色々なところに目配りをしているということは、どこかに焦点化していくきっかけになるとも思うのですね。つまり、一步であっても、とりあえず踏み出しているということなのです。一步も踏み出していない人が「さあ、今度はこれをやれ、これも面白そうだぞ」と言われても、やはり踏み出しにくいと思うのです。ですから見方によっては一長一短だと思います。いかがでしょうか。

一般的には、様々なことに興味を持たせることは、教育の目標になるのではないのかと思います。その辺りが、どうも先生のお話がよく理解できなかった点なのですが。

上淵: まず前提として、教育に対しての考え方は色々あると思います。私はどちらかと言うと、何か一つの観点到絞って、あるいは一つの価値観とか感じ方から、「こういう人が必要だから、ここではこのように教育して育てよう」というような考え方は、採らない方がいいのではないかと考えています。むしろ多様な人がいて良いのだと思います。分析的に物事を考えるような人というのは勿論必要です

し、それから逆に、色々なところに目配りの効くような人も必要がある。一面的にこんな人ばかり、という状態になるのは問題だという気がします。

興味の「持続」の測定

興味の測定というお話で、その場かぎりの興味について測定することが無意味とされたのですが、興味の持続性についての測定はされていらっしゃるのでしょうか。

上淵: それはあります。何度か同じような場面で同じような内容の測定をした場合、当然変動はありますよね。同じようなことをして、同じような種類の作業をしても、その中で、こんな風が変わったりしますよ、あるいは同じままですよ、と。そういう研究はなされているかと思いません。

「興味」の定義について

「評価」を行う場合には、対象についての定義が必要だと思います。今日のお話については、「興味」というものを、どのように定義しているのか、曖昧なままにうかがってしまったのですが、先生は「興味」ということを、どういうものとして定義されてお話をされたのか、改めて確認させてください。

上淵: 正直言って最も悩んだのが、正にその点です。ここで言う「興味」とは要するに快の感情を持ってあるものに着目する、というような程度でお考えいただければよろしいかと思います。大切な質問をしていただいたと思います。

評価基準が被験者に与える影響

実際の教育場で動機づけを測定する時の1つの大きな問題、というか考慮すべき点として個人的に気にしていることがあります。つまり、私たちが「こういうことを動機づけの指標にしよう」とすると、それで、もう子どもたちはそれに合わせて努力してしまう。仮に、テストであれば、基準に合わせようと思ったところで、そうそう簡単に点数は上がらないからまだいいのですが、動機づけの使用では態度や行動として、こういうことが起こりやすくなってしまいうように思います。そのような時に、実際の教育場で「動機づけ」を評価するにあたって、どうすればよいのか、何かお考えはありますか。

上淵: はい。それも非常に大事な質問です。正直、大変難しいことだと思います。先程、相互作用の話をしました、長い間子どもたちとの関わりの中で、どういう変化が起きているのかを見ていくというような視点でしか、ちょっと今はやりようがないのではないかという気がしています。つまり、測定をするということ自体が、そもそも何ら

かの心理的な影響を与えてしまうということになりますよね。従って、子どもたちが変化するのはある意味当たり前で避けられないのだ、と。それも要素として考慮しつつも、では、変わったというならどのように変わったのかを、さらに見ていくような形でしか対応できないように思います。

動機づけを高める要素、高まっている状態

動機づけを高める要素は何か。高まっているのか、高まっていないのか、そういうことを捉えるようなものは何になるのでしょうか。

上淵：例えば自己効力で上がるのか、とか、あるいはよく言われる話ですけれども、原因帰属、成功をした時に自分のせいで成功したと思えるのかなど、そういう話だと思います。また、何を持って捉えるのか、については、色々あります。「動機づけ」という研究が、比較的、行動主義の中に取り入れられて発展したという経緯があり、本当だったら、いわゆる学習行動や達成行動のようなもので見るべきであると考えます。つまり、自己報告のような形ではなく、どちらかという目に見えるもの、実際にどういう行動を取っているのか、その行動はどのようなものなのか、どの位の時間がかかっているのか、というような観点で調べていくのが適切だと思っています。

興味が学習を阻害する？

興味が学習を阻害することもあるのだ、というようにお話でした。一般的には興味や関心があることはいいことだと評価されています。それに対して、別に良いわけではないのではないか、とおっしゃっている理由などをお尋ねします。

上淵：先程申し上げましたように、必ずしも学習を促進するだけではない場合もあるだろう、というのが1つです。それからもう1つは、先程の質問とも関連しますが、もしも教育者の方が「何にでも興味を持つ人を育てよう」と考えて子どもに関わるならば、その子どもたちにとってはすごく危険なことではないか、ということです。さらに、先程申し上げましたが、何にでも興味を持つ人ばかりを育てるということが、社会にとってもプラスなのか、ということ。

もう少し、具体的をお願いします。

上淵：ええ、そうですね。では、私自身のお話をしましょう。私は比較的色々なことに興味を持っていたのですが、先程の典型的な例でして、色々なことに興味があり過ぎて、一つのことに大成しなかったと思っており、反面教師的な

面があります。

「興味が学習に常に有効であるとは限らない」という点について、理論的な帰結であるのか、それとも何か実証的な研究はあるのでしょうか。

上淵：十分な実証データがあるとは言えません。しかし、気分一致効果などを踏まえると論理的にも導き出される結論と言えるでしょう。

国際調査結果に見られる「動機づけ」の低下

最近よく国際学力比較が話題に上ります。日本の子どもの学力の低下の問題と同時に、それぞれの教科に対する関心や意欲が非常に低下していると言われています。むしろ、そちらの方が問題である、との意見も多いです。ただ、測定方法について現状は単にアンケートを取っただけですので、不十分かと思いますが。この結論そのものと、それから今後我々がこの問題にどう対処すべきかについて、先生はどのように思われますか。

上淵：難しいですね。今のようなお話は、よく言われることですけれども。その背後にあるのは、日本が戦後に高度成長を迎えた時には、いわゆる製造業的な産業が比較的発達した。なので、いわゆる「産業型の社会」をこれからも持続させることが日本にとって意味があるのだという考え方が、背景にあるのではないのでしょうか。言い方を換えるならば、どちらかと言えば工学的な人間、技術的な人間を育成していかなければいけないという、そう当てはめて考えていること自体に問題である、というように考えることができます。

要するに、一般的にはそのように言われているが、言ってしまうと、学力低下とは関係ない、と。そういう観点から離れて、考えていけば良いとお考えでしょうか。

上淵：いいえ。学力低下と別問題、ということではありません。むしろ、例えば理科離れ、理科離れとは要するに意欲や関心がないということだと思いますが、それから実際の学力が下がっているということについて、それを問題視するような視点そのものが、それでよいのか問われていないという気がするのです。

具体的にはどういうことが問われるべきだとお考えでしょうか。

上淵：簡単に言えば、様々な立場から、例えば産業型の社会に限らない別の視点から、違った形で人や社会のあり方が考えられるのではないかと。ものの見方で言うならば、必ずしもいわゆる工学系・理系の人たちをできるだけたくさん育てようという社会にしなくてもいいかなとい

うことです。一方で、産業型社会を念頭に置いた価値観も必要だと思うので、否定はしないのですが。しかし、そうではないものの見方もしないと、問題が見えてこない。一面的に、「理系がまずい」とか、そういうものの見方になる可能性がある。それはまた危険である、と思います。

学校における「動機づけ」の評価の実際について

貴重なお話をありがとうございました。一般に学校の現場では「関心・意欲・態度」を評価することになっています。しかし、先生のお話では、必ずしも興味というのはプラスな面ばかりではないとのお話がありまして、少し衝撃を受けています。そのような中で、では実際に、既に評価することになってしまっているものについて、どう対応していったらよいのか。どのようにすれば、実際に学校で行う評価としては適切なのか、先生の個人的なお考えで結構ですので、お教え願えればと思います。

上淵：ありがとうございます。確かにその通りですね。即答するのはなかなか難しいご質問です。考えられることとしては、フォーマルな評価とインフォーマルな評価をとりあえず分けておく。そして、フォーマルな評価の方はある意味で柔軟に簡潔に付けておく。そして、インフォーマルなレベルで、「このようにあなた(学習者)のことをよく考えて見ていますよ」というようなより深い交流が教師と生徒の間で作れていればいいのかという気がします。フォーマルな評価は、指導要録や選抜資料で不利益が起らないように簡潔に記述しておいて、具体的に子どもと交流する時にはより深い感じ方、考え方を採っていく、というのが今のところ私の考え方です。

教育者は「興味」を、どう考えるべきか

「興味」が学習にとって必ずしも常に有効ではない、というお話は私にとって大変興味深いものでした。しかし、教育者の側からすると、興味を持たせるところを入り口にして教育していくことが非常に重要なのではないかと、いう気がするのです。今日のお話は必ずしもそれが正しいわけではないということだと理解しました。そうすると、教育者の側はどういう態度で教育をしていくべきなのか、先生のお考えをお聞きできたらと思います。または、先生が実際にどういう態度で教育をしているかということをお聞かせください。

上淵：「興味」は全て良いとは限らないという話をしましたが、いわゆる授業で新しいことを学ぶ時には「興味」というのが当然必要だと思うのです。だけれども、ずっと「これ面白い、面白い」というようなことだけでは、実は

深い思考ができなくなってしまう場合もある。少し冷静になって、改めて物事を考えてみる必要も当然出てきます。お尋ねの点では、知識が導入された時にはその情報に注目しなければそこから先は進みません、とお答えしておきます。

そうしますと、まず「興味」を持たせるということが1つ最初にあるべきとして、さらにプラスアルファで何か別なことが必要、ということですね。「興味」が1つだとすると、他の要素には何と何があるのでしょうか。上淵：この場合には単純に「興味」があって、いわゆる活性化が高くなっているときに、一旦クールダウンさせて、少し冷静に物事を見ていくことです。小学校の授業の例なんかで、いろんな考え方があつと出されて、子どもたちがわいわいがやがやしている時に、意見が出るのはいいけれど、それをもう少し吟味してみましよう、と言うのは、やっぱり重要だということだと思います。

興味と行動の関係

先程、行動から興味を推し量るというお話がありました。しかし、必ずしもある行動をしたからといって、興味があるとは限らない。例えば課題に取り組んだからといって、それが常に興味の存在を保証しない、ということがあると思います。そういった時に、どうやって行動から興味を推し量るのか、どのようにすれば、ある行動から興味を測定できるのか、少しお伺いできればと。

上淵：その問題は、先程も述べましたように、十分に考えられてはいません。むしろそれは今後、考えていくべき課題ですね。興味というのは、先程言いましたようにデューイあたりが言っていて、既に学問の歴史があるわけです。しかし、どちらかと言えば、私たちの身近な問題の研究には必ずしも適用されていないという状態です。ご興味があるならば、研究していただけると有難いです。

参考文献

「動機づけ研究の最前線」上淵寿(編著)北大路書房(2004)

以上

